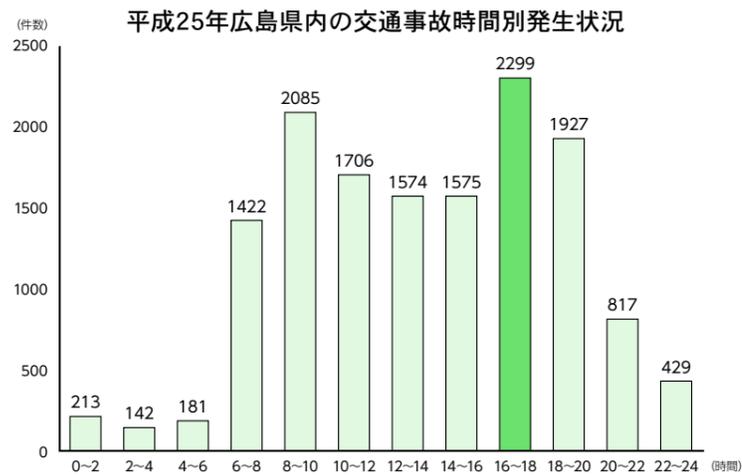


被害者になっても、加害者になっても…



16時から18時までの間が、最も事故発生率が高い。特に秋からは日が短くなり、気が付かないうちに、ものが見えにくくなる。さらに、帰宅時間などと重なり、「早く帰りたい」という焦りの気持ちが高まることから事故発生率が高まる。

自転車も、加害者になるという意識を一。

「自転車だから大丈夫」、「事故を起こしても大事にはならない」。そんな思い込みが死傷者を出す重大な事故につながります。

自転車の事故でも被害の大きさにより、数千万円の賠償金を支払わなければならないケースもあります。何より、加害者が未成年の場合、賠償責任は保護者である親が負うことになります。

実際に、自転車を運転していた小学生が帰宅途中に下り坂で女性と衝突し、重傷を負わせた事故では、保護者に対し、9,500万円の賠償命令が出されました。

広島県内で、自転車が関係した事故は、平成25年度で2,589件もあり、その内13人が亡くなっています。ここ数年で減少傾向にはありますが、「自転車はエコで手

軽」「免許がいらない」といった気軽さから、「自転車は車両である」という感覚が薄れていることが大きな原因です。

エコで手軽な移動手段として日常生活に欠かせない自転車。しかし、ひとたび事故を起こせば、貯金を崩し、マイホームを売っても払えない。子どもが起こした自転車事故ひとつで、家族が今までどおりに暮らせない事態にもなってしまふこともあるのです。

だからこそ子どもたちには、交通ルールを繰り返し、繰り返し教えていくことが大事なのです。学校や地域での交通安全教室は、そのきっかけづくり。日々の生活の中で、一番身近な家族がその大切さを伝えていくことが重要だと思っています。



くらし安全指導員  
ごとう・ひでのぶ  
後藤 秀信さん

昭和49年広島県警察に採用。37年間の警察署勤務で主に警備・警務の業務に携わる。平成24年4月から、くらし安全指導員として、市役所地域政策課で交通安全・防犯対策に従事。廿日市地域を担当。(62歳)。



特集 被害者になっても、加害者になっても…

写真は、9月9日18時30分頃。この日の日没は18時26分。まだ空が少し明るいのに地上は暗いという状況が、人間に錯覚を起こさせます。薄暮と言われるのは、日没後1時間。過去10年間の10月1日の平均日没時間は17時55分なので、10月は17時にはライトを点けることを心掛けましょう。

今年に入ってから、廿日市警察署管内で起きた交通事故の件数は、7月末現在で1701件。その内、人身事故は205件で、1人が亡くなられています。昨年の同時期と比べ、件数は減っているものの、決して少ない数ではありません。特にこれからの季節は、早く日が暮れることから、薄暮時(夕暮れ時の時間帯)が長くなり、交通事故が多発します。被害者になっても、加害者になっても大きな悲しみに包まれる交通事故。今一度、交通安全について考えてみましょう。

問合せ 地域政策課 ☎9139

「起っつしまう」ものがそれが交通事故

誰でも被害者になり、また加害者になる恐れがあるのが交通事故。どちらの側になっても、まともに、今までの平和な生活は打ち砕かれてしまいます。いくら罰則を強くしても、交通事故は起こります。それはほとんどの場合、意識して「起こす」ものではなく、人の不注意により「起こってしまう」ものだからです。その「起こってしまう」ものを防ぐにはどうしたらいいのでしょうか。それは、一人一人が注意を払い、防ぎし

18時までの間です。この時間帯は「薄暮」と呼ばれ、徐々に周りが暗くなっていく時間帯を指します。

夕方の薄暗くなる、昼と夜の移り変わる時刻で、古来より逢魔時、大禍時と呼ばれ、魔物に遭遇する、あるいは大きな災いを受けると信じられてきました。「薄暮」の時間帯は、空は明るいのですが、地上にはすでに夜が忍び寄り、空に比べて極端に暗くなっている状態です。

「まだ見える」は、実は「見えづらい」

車両などを運転中に、対向車や道路標識、人や自転車が見えづらくなっても、「まだ見える」からとライトを点灯せずに走行することがありませんか。「まだ見える」と思っている

「薄暮」という魔の時間

グラフにもあるように、最も事故発生率が高いのが16時から

ということとは、実は「暗くなったので見えづらい」と感じているのです。

あるデータによると、真昼には10万歩以上あった明るさが、日没の1時間ほど前になると、1000歩以下になってしまっているという結果も出ています。それほど薄暮時の地上は思っている以上に暗いのです。

また、この時間帯は物の輪郭がぼやけて見え、距離感がは

きりしくなるのが特徴です。

さらに人間は、自分にとって見えやすい明るさの部分をよく見ようとし、そこから外れた部分、例えば極端に明るくまぶしい部分や、見えにくい暗い部分からは、余り情報を受け取らないようにする習性があります。

車両を運転する際には、暗いと感じる前からライトを意識的に点灯するように心掛けましょう。